リニア訴訟　岐阜県瑞浪市大湫町水涸れ（４月２４日資料）

原告代理人　岡本浩明弁護士

１　瑞浪市大湫町の日吉トンネル南垣外工区における井戸水等の減水問題に関する岐阜県環境影響評価審査会地盤委員会における議論状況などについて、第９回の地盤委員会の議論に基づき、主張する。なお、地盤委員会はなお継続中である。

(1)　令和７年１月２２日岐阜県環境影響評価審査会地盤委員会（第９回）

この日の委員会では、まず、ＪＲ東海より、井戸等の減水について、影響範囲の把握、原因究明、被害拡大防止、について説明がなされた。

その後、瑞浪市長より、令和７年１月１８日に実施された、ＪＲ東海による地元住民に対する説明会の状況が報告された。**すなわち、ＪＲ東海から、３つの代替案の実現可能性について説明があり、１案として遮水壁については施行実施が難しく現実的でないということであり、参加した住民から、実現できなければ提案してもらってもしょうがないという厳しい指摘があったということである。また、２つ目の代替水源については現実性は高いと考えるが、配管ルートや地権者等の協議など課題について今後検討していくという説明がなされたということである。案３の湧水のポンプアップについては、竪穴等の技術的課題もあり実現可能性について検討するということであったが、やはり住民から本当にこんなことができるのかという心配の声があがったということであった。**

その後の質疑応答について、委員会の委員からは、影響範囲の把握に関して提出された資料やデータについて、概ね好意的に評価されていた。

ただ、最も重要な被害拡大防止については、本注入ができるかどうかは分からない、その判断は４月以降になる、４月以降のいつになるかもわからない、その間、４月までの間に、被害拡大防止に関する別の案も検討していない、とりあえず新たな水源地を確保し、減水や地盤沈下については諦めているとも思える状況であったことから、委員長から厳しい指摘がなされた。

具体的には、委員長は、「非常に困難な状態にあると、トンネルの施工上の安全性とか今後共用された場合の安全性とか、そういうことを考えていくと、その本注入の可否の判断が非常に悩ましくなっていると、逆に北薩トンネルの件があるので、そこの状況がやはりまだわからないというのもあろうかと思います。

そういったところは、十分に理解はできますが、一方で、やはり当初から、水環境を元に戻してほしいという、そのために何をすべきかというところで、地下水位の低下が主な原因であるということを判断されて、地下水位の低下抑制、回復すれば、長期的に何年かかるかわかりませんが、元の状態に近づけるような、そういった努力をしましょうということで話は進んできております。

地下水位の低下抑制、回復ということもそうですが、一方では、実際にはやはり皆さんの生活の問題、生活環境、自然環境、そちらの修復をどうするかという問題ですので、そこに対する対応という意味もあって、代替案という、ポンプアップしたりとか、新たな水源地を確保するとか、それは代替案というより、今回目指しているのは元の状態に戻すというところを目指している中で、もう少し代替案として色々な手立てが考えられるようなものと思ったのですが、やはり代替水源確保という、そこにどうしてもいってしまうものなのですが、やはり自然環境そのものを考えたときに、何か他の視点でと言いますか、対応の仕方というのが考えられないのか否かというところです。その辺りはこの間に何か考えられたことがあるのですか、やはりもう水源確保というところで、そこに何か終始してしまっているところですか。自然環境とか、もちろんその文化的な価値のあるものとか色々なものがあります。今回、地元の方で色々な植生、生態系の影響で懸念も出ていますが、そういったところを元に戻す、近づけるということに対して、一応シナリオとしては本注入して、減水して水位の回復を長期的に見込んで、そうすると地表の状態がだんだん戻ってくるのではないかというお話を、そういう想定でしてきているのですが、今の困難な状態に陥っているのは、もちろん諦める段階でもありませんが、他の代替案というアプローチの仕方というのは、やはり水源確保にそこに行ってしまうのですか。他に何か考えられたことはないのでしょうか。」と発言した（議事録２０頁）。

また、他の委員からも、ＪＲ東海のいう代替案という言い方が、実際にはコミュニティの水を守るための代替案であるのに、あたかもトンネルの湧水を減らす代替案のように聞こえて誤解を招くので、何の代替かというのをはっきりすべきだ、という厳しい指摘がなされた（議事録２１頁）。

さらに、委員長は、「今のお話を伺うと、本注入に関する減水のための注入に関しての代替案は今のところないということでしょうか。

それで注入の可否の判断はまだ時間がかかると、事例の結果とか、今回の調査データに基づくと、他にやること、やれることはもうないのですか。

注入が難しいというお話になると、少し諦めのような雰囲気が感じられてしまうのですが、そうではなくて、本注入に関してはまだ先ですが、この間、何かすべきことというのは、もうデータを集めて分析するしかないのですか、と

いうことです。

他に何か考える、何か今方向性というか、こういったことは実は検討する事項としては上がっているとかはあるのですか、というところです。

一方では、代替の言葉の使い方は先ほどご指摘いただいたのですが、先ほど申し上げた生活環境、自然環境、そちらに対する対策について、色々なシナリオと言いますか、そういったものをいくつか作っていかなければいけないのではないだろうかというところで、全体をつなげていかないといけないのだろうと思います。

なんとなく本注入ができなかったらそれで終りみたいな、そういったことにならないように、なにか今からやはり本来考えていかなければいけないことを、以前から申し上げていることだと思うのですが、できなかったらという表現が良くないのかもしれませんが、そこの辺りについてはまだまだこれからでしょうか。仮に本注入は難しいと判断した場合には、どうするということはもう今考えられているのですか。」と発言した（議事録２１～２２頁）。

かかる委員長の発言に対し、ＪＲ東海は、「トンネル湧水の低減につきましては、先ほども申し上げたように、やはり唯一の事例として、このトンネルの工法を使っていますので、それ以外に何かあるかと言われましてもなかなか見つけられない状況ですので、引き続き見つけられるような検討はしますが、何かでは本注入の可否を判断するまで、もしやめるとした場合に何か次のものが出てくるかというと必ずしも出てくるものではないと考えております。」と回答した（議事録２２頁）。

被害拡大防止について、委員長は、最終的に、「そのようによろしくお願いします。

本日は、被害拡大防止に関して本注入の可否について今後の方針を示していただく、それは難しいようであれば、まさしく地下水位の低下の抑制、回復に向けた代わりの対策というものをどういうふうにお考えになっているかということを示していただく予定だったと理解しておりますが、まだまだ時間を要するというお話は十分理解しました。

ただ、先ほど申し上げましたように、地下の様子、地表もそうですが、変化は続いておりますので、先ほど、市長のお話もありましたが、スピード感というのは、非常に大事なことだと思います。

状況をどんどん悪化させた上での対策よりも、やはり一番いいのは未然防止ですが、現状の中でできることを、見つけていただきたいということが、強く思うところでございます。」と締め括った（議事録２３頁）。

(2) 小括

以上のように、瑞浪市大湫町の日吉トンネル南垣外工区における井戸水等の減水問題は、約１年を経過した時点においても、被害拡大防止について、何ら有効的な対策を講じられない状況であり、２０２５年４月まで、本注入の可否の判断を待つという、何ら打つ手のない状況である。地盤委員会は、被害拡大防止を諦め、代替水源地を確保すればよいというような姿勢をＪＲ東海に見て取り、地盤委員会からＪＲ東海に対し、厳しい指摘がなされるに至っている。実際、ＪＲ東海は、住民説明会においても、代替案として３つを提案しているが、そのうち２つはおよそ実現可能性もないような遮水壁や湧水のポンプアップというものであり、当初より、代替水源の確保という結論ありきの姿勢である。

このような経過からして、いったん破壊してしまった自然環境は、回復することはもとより、被害の拡大を防止することすら容易ではないことが分かる。そして、ＪＲ東海には、代替水源の確保しか検討していない。そもそも自然環境を保全しようとか、破壊してしまった自然環境を元に戻そうという姿勢は皆無である。とにかく工事を優先し、破壊した自然環境は代替手段や金銭補償で済ませばよいというのがＪＲ東海の方針であることは、これまでの岐阜県環境影響評価審査会地盤委員会におけるＪＲ東海の態度から明らかである。ＪＲ東海の行った環境影響評価もそのような姿勢・方針でなされたものであり、いかにずさんなものであったかが今表面化しているというべきである。

２　要対策土の問題に関して、令和７年２月２６日に開催された岐阜県環境影響評価審査会（第４回）における議論状況などについて、主張する。

要対策土の地質や度量については、地質の断面図等により一応の見積もりがあるが、結局は、掘ってみないと分からないということである。

また、大気質については、運搬時にダンプの上にシートなどをかぶせるということである。

水質については、遮水構造のシートの耐久性が１００年ということであるが実績があるわけではないのでモニタリングをしっかりすべきという指摘がなされた。

そのほか騒音や振動、盛り土、生態系について議論がなされた。

以上